



# ぼくは半魚人

5月29日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 5月29日のおはなし「ぼくは半魚人」

---

ぼくは半魚人だ。人魚ではない。

上半身が女性で下半身が魚だと人魚と呼ばれるのだけれど、上半身が男性で下半身が魚の場合は人魚と言ったらいけないのだろうか。あ。でもぼくは違う。ぼくがそうだということではない。

ぼくは半魚人だ。

半魚人と言うとどんな姿を思い浮かべるだろうか。上半身が魚で下半身に人間の足がついている。あるいは全身がうろこで覆われていて、頭が魚になっていて、手足があって、指の間には水かきがついている、なんてイメージもあるだろう。

そのいずれでもない。でもぼくは半魚人なのだ。

一見するとぼくは「さかなクン」に似ている。ハコフグの帽子をかぶっているわけではない。あの帽子の部分も身体の一部なのだ。それからその下に人間の顔があるわけでもない。感覚器官がついているので顔と言えなくもないが、目や口はさかなクンのハコフグ帽のところに正式のがついている。

あんなにカラフルじゃないけどね。

なんというか、さかなクン基準で説明しなければならないのが、なんともくやしい思いがある。だってぼくは、ぼくたちは、はるか祖先に遡るまでずっとこの姿で暮らしてきていて、いわばこっちこそが本家本元であり、さかなクンなどまだあのかっこうを始めて十年になるかならないかだろう？ なのにどうして本家が自分の姿を説明するのにさかなクンを引き合いに出さなければならないのだ？

おかしいと思いませんか？

まあいい。そんなことで文句言ったって始まらない。だいたいぼくが言い出さなければあんたたちは半魚人の姿になんて関心なかったろう。いや。そんなことを言ったら、いまだってぼくが勝手に書いているだけだ。冷静になろう。半魚人の姿の解説をしたのもぼくの勝手。さかなクンを引き合いに出したのもぼくの勝手。怒ったって仕方がない。だからもうやめよう。

本論に入る。

端的に言おう。お願いがある。本当は「いなくなってくれ」というつもりだった。「お前らしい加減にしろ。もう、ここからいなくなってくれ」と。「川や海にひどいものを流し込むのはやめてくれ」と。最近あんたたちは放射能がどうの、深刻な病気の発生の確率がどうの、畸形の子供が生まれる可能性がどうのと言っているみたいだが、それは確率の問題なんかじゃない。

あんたたちからすれば、ぼくらがさかなクンに似ているだけで充分笑えるかもしれないが、もっともってあんたたちが大爆笑するような無様な姿の半魚人がどんどん生まれてる。見に来るかい？ きっと笑いが止まらなくなるぜ。知っておいた方がいい。それは「確率の問題」なんかじゃない。現実なんだ。現実に生まれて来ているんだ。

それから生体濃縮って言葉を知っているか？ たぶん知らないんだろうな。人類にはそういうことが思い付けないんだろう。教えて上げよう。あんたたちは、水の中にばらまいた毒物は大きな海の中で広まって薄まって行くと思っているんだろう？ でもそうじゃないんだな。確かに大海に飲み込まれいったんは広まり薄まって行くかに見える。

でもね、それをちっぽけな奴らが食べて身体に蓄え、それをちょっと大きな奴らが食べて身体に蓄え、そして食物連鎖ピラミッドの頂点に位置する生物の中にどんどん濃縮されて蓄えられて行くんだ。知らなかったとはいわせないぜ？ ぼくらは生まれながらにして有機水銀コレクターで、ダイオキシンの掃除屋で、泳ぐ放射性廃棄物なんだ。水の汚れを一手に引き受けているわけさ。

ぼくが「お前ら迷惑だから、とっとといなくなれ」と言いたい理由はだいたいわかってもらえたと思う。でもね。それはやめにした。さっき干潟のところであんたたちの一人に会ってさ。それが「たたなクン」って言いやがったんだ。たぶん生まれてから三年も経たない個体だと思う。スカートをはいていたから女だろう。それがぼくを見て「たたなクン」と言いやがった。

笑えよ。

笑っていいんだぜ。「さかなクン」ってのを、うまく言えなかったんだな、その個体は。それからあっけらかんと声を上げて笑った。それからぼくの方に向かって走ってきた。たいていの場合人類と遭遇すると絶叫される。いくらさかなクンに似ていても、水の中からぼくたちみたいなのが出てきたら、そりゃあ普通は驚くだろう。よくて遠巻きに見るってところか。

それがその生後三年になるかならないかの人類のメスの個体は、「ギャギャギャギャ」みたいな変な奇声を上げて笑いながら、よたよたとこっちに向かって走ってきた。両腕をいっぱい広げて、ためらいもなく。干潟の沼地の足場の悪いところだ。すぐに転んでぬるぬるのぐちゃぐちゃの糞ダメみたいな匂いのするヘドロまみれになった。

でもまだ笑っている。

きゃっきゃ、きゃっきゃと笑ってるんだ。

ぼくのことを見て「たたなクン、たたなクン」って繰り返しながら。

ますます泥まみれになりながら、人生でこれ以上おかしなことはないって感じで笑ってるんだ

。

助けに行っただ。他にどうしようがある？ ぼくは「たたなクン」になりきって、自分もわざと泥まみれになって、泥まみれのさかなクンにしか見えないようにして、女の子を抱き上げた。女の子は身をよじらせて反り返りながら大笑いしている。「たたなクン、らっこした」って。ラッコかと思ったら抱っこのことだった。まったく小さな人類と来たら。

それから陸に上がり、子どもから目を離して迷子にしておろおろしている不注意な親のところに行って「ギョギョッ！ 女の子が採れちゃいました！」って甲高い声で言って、泣いて感謝する親に「早く、泥を洗ってあげてください！ くさいですから！」ってハイテンションで叫んで、それでも何か言いたそうな親に「いいんです。さかなクンは、いま、この時間しかいない珍しい魚を探しているの、さよなら！」と無理矢理叫んでその場を立ち去った。

誰が珍しい魚って、このあたりじゃおれが一番珍しい魚だよと思いながらね。

だからもう「いなくなれ」とは言わない。ぼくに抱かれて「たたなクン、たたなクン」で笑い転げるあの個体を失うわけにはいかない。でも覚えていて欲しい。海の中にはさかなクンにそっくりなぼくらがいて、あんたたちより先に、あんたたちが辿るべき無惨な突然変異の実験台になっているってことをね。

(「遠巻きに見る」 ordered by suzumena-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」  
をご活用ください。

## ぼくは半魚人

<http://p.booklog.jp/book/37716>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37716>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37716>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.